

2021年6月27日～7月3日 各家庭でのディポーション用テキスト

■出世についての訓練（4/4）

これはいつの世にも当てはまることである。「高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。……自分の富に拠り頼む者は倒れる。……高ぶりが来れば、恥もまた来る。……高ぶる目とおごる心—悪者のともしびは罪である』（箴言 16:18、11:28、2、21:4）。出世についての訓練は、次のように語っている。私たちは自分が失われた者であることを知ったころのように、罪に対して敏感であるか。救われた当時のように、救い主に対して感謝しているか。自分の持てるすべてである一杯の水を隣人と分け合って飲んだころのように、他人のために心を配っているか。神の恵みについて人々に語りはじめたころのように、学びにも奉仕にも徹底的であるか。貧困であったときと同じように、神のお約束に信頼しているか。なけなしの財布をはたいてまでも喜んで十分の一をささげたころと同じように、託された富の信頼されうる管理人であるか。あるいは、立身出世のゆえに高慢となり、特権を持つゆえに無遠慮となり、繁栄しているゆえに信仰に乏しくなり、豊かであるゆえに他の人々に対して無慈悲となっているか。強くなるに及んで、その心に高ぶり、滅亡を招こうとしてはいないか。

この出世についての訓練を全うするための最善の準備は、全く悔いた心である。そのような心を持つ人は、常に自分の卑しさを忘れず、主の前に砕けた心を持ち、他の人々の批評に対して注意深く、自分の楽しみを忘れて他人の幸福のために心を用いる。逆境によって私たちは、繁栄が自分の功績ではなく、ただ主のあわれみによることを、深く教えられねばならない。また、どれほど成功しても、自分はお

も「役に立たないしもべ」であることを、いつも覚えていなければならない。柔和で心のへりくだったキリストをこの上なく意識し、この世での自分の立場がどんなに高くても、心のうちではキリストの御足もとに座していなければならない。

どうか神が私たちにこの厳格な訓練を受けさせてくださるよう。それは、私たちが出世を、奉仕のために行使すべき神の家の管理職と見なすことを可能とする。私たちはいよいよ神に頼り、いよいよ任務遂行に努め励み、人のへつらいを嫌い、人からの賞賛を求めず、私利私欲に死に、日々神のみこころを行なうことを喜ぶことができるようになる。こうして私たちはいよいよへりくだった心と、神と人に対する愛をもって、栄えていても貧しくても、楽しくても苦しくても、出世しても下積みのままでいても、常に変わらず主にお仕えするのである。

「おとうさま、私はきょう、どこで働きましょうか。」
私の愛があたたかく流れ出して行くようだ。
—と、主は私に小さな小さな点を指して言われた。
「私に代わって、あれの世話をするように」と。
とっさに、私は答えて言った。
「いいえ、いいえ、あればかりは
たとわりっぱにできたとしても
だれも見てはくれないでしょう。
どうぞあんな小さな場所は
ごかんべんのほど願います。」
—と、主はやさしく答えて言われた。
きびしい声では決してなかった。
「ちっぽけな、と言うのですか。
その心の底を省みなさい。
あなたが仕えようとしているのは
人ですか、それとも私ですか。
ナザレは小さかったのですよ、
ガリラヤもやはり小さかったのですよ」と。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第二十六章「出世についての訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。